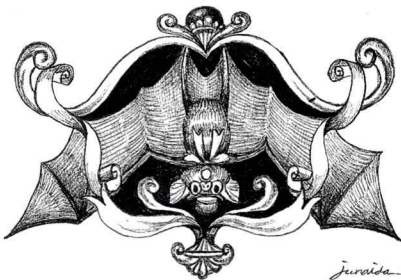


# 朝日 俳壇

# 歌壇



＜日曜日のプローチ 44＞ junaida

### ◆小林貴子選

☆鬼は外立派な鬼になって来よ  
 薄暗い体育館で卒業す  
 (太田市) 渋谷 今美  
 この頃は一段多い雪だるま  
 (小平市) 倉持 聡美  
 (白田市) 蜂巣 幸彦  
 地下鉄に乗ってもぐらの春休み  
 (東京都新宿区) 各務 雅憲  
 流水の哭き声哀し夜もすがら  
 (宝塚市) 安井 修  
 亡き母の最後の夜のおんこう鍋  
 (池田市) 右手 明則  
 ふぶ捌きたしその資格取りにゆく  
 (直方市) 瓜生 碩昭  
 ストローや表紙の黒き闇魔帳  
 (生駒市) 高橋 裕樹  
 ねねも好き々々役も好き春立ちぬ  
 (京都市) 山口 明紀  
 剣とも無用ともなる水柱かな  
 (茨城県阿見町) 鬼形のふゆき

【評】一句目、鬼を追い出しはするが、エールを送るとは優しい。二句目、も〜と明るい灯の下で卒業したかった。三句目、近ごろの若者の小顔なこと。それを映して雪だるまも二頭身から三頭身に。四句目、人間ももぐらも春休みを楽しもう

### ◆長谷川耀選

☆鬼は外立派な鬼になって来よ  
 人間は戦争猫は恋をして  
 (太田市) 渋谷 今美  
 物置から出て来たやうな臍月  
 (町田市) 枝澤 聖文  
 灘の春遙か東南モアイ像  
 (東京都板橋区) 竹内宗一郎  
 (新宮市) 中西 洋  
 生涯を担任として老の春  
 (小城市) 福地 子道  
 底冷えの心に一つチヨコレート  
 (伊賀市) 中森 里江  
 さよりの舟二隻夫婦のごときもの  
 (尾張旭市) 石川 盛久  
 風花の文字書く空の青きこ  
 (宮若市) 光富 渡  
 東京に二つのタワー深き雪晴  
 (横浜市) 丹羽口憲夫  
 春として思ふことあらずや春よ  
 (東京都練馬区) 吉竹 純

【評】一席。鬼も泣いて喜ぶ一句。きっと頑張りますと。二席。つまり人間は以下。といえは猫に悪いか。三席。ぼうっとしていて麗しくて。「風呂場から」は理屈の句。十句目。春という季節に呼びかける「春との相聞」。五・九・三拍。

### ◆大串 章選

☆シベリアより父は還らず流水来  
 ぼろぼろの母の歳時記春炬燵  
 (茅ヶ崎市) 清水 吞舟  
 鯉の群池の底まで春めきて  
 (奈良市) 上田 秋霜  
 戦知る人減るばかり黄砂降る  
 (京都市) 室 達朗  
 (加東市) 藤原 明  
 諺に尋ぬる母や日向ぼ  
 (大阪府) 島田 和子  
 山は半ば目覚め麓は噂れる  
 (神奈川県松田町) 山本けんえい  
 花冷えや瓦礫の町に来る夜明け  
 (寝屋川市) 今西 富幸  
 布団干す幸せらしき家族かな  
 (我孫子市) 渡辺 肇幸  
 草萌ゆる無人駅より外国人  
 (日田市) 武内 政行  
 薄水を踏む子避ける子通学路  
 (箕面市) 藤堂 俊英

【評】第1句。第二次世界大戦終了後、多くの日本人がシベリアに抑留され尊厳を失った。第2句。使い古した母の歳時記、俳句に夢中だった母の一生をしみじみ思う。第3句。「池の底まで」が明るく健やか、泳ぎ回る鯉の群れが目につく。

### ◆高山れおな選

春来る徹子の部屋の戸を開けて  
 (福岡市) 釋 鯛硯  
 やや傾ぐ母といふ字や梅日和  
 (北九州市) 野崎 仁  
 泥こねる團児は知るや建国日  
 (草津市) あびこたろう  
 ☆シベリアより父は還らず流水来  
 (茅ヶ崎市) 清水 吞舟  
 ピラカンサ目白群れ来て雪を跳ね  
 (高知市) 戸梶 優子  
 雪女踊らすように春の雪  
 (甲府市) 藤巻 嘉秀  
 落椿このランナーも跳び越ゆる  
 (東京都板橋区) 竹内宗一郎  
 かうみえて世界に一人青き踏む  
 (東京都江東区) 小出 功  
 バイバイが上手にできて日脚伸ば  
 (東京都中央区) 久塚 謙一  
 展示室江戸と昭和の離静か  
 (甲賀市) 吉岡ひろ子

【評】釋さん。こうした擬人法は実は王朝和歌の得意技。高橋睦郎に〈今朝外に立つ不審者を春といふ〉。野崎さん。梅の中に母の字。「やや傾ぐ」の寄り。あひこさん。泥遊びが思わせるのは、神武即位より以前の大国主や少彦名の国造りか。

## うたをよむ 俳句は人生の暗喩

大石 雄鬼

昨年、現代俳句大賞を受賞した中村和弘の句集『荊棘』は、今の流行の句に對し硬派な独自の句集である。

目ん玉の曇りを舐めて大守宮。

その大守宮の姿は、蜥蜴などの爬虫類の特徵的なしぐさとして誰でも想像できるだろう。「俳句のなかに私」という人間を生かす」をモットーとする結社の主宰の句集ではあるが、意外に「私」や「人」そのものは出てこない。動植物を中心とした自然界や自然界と人間の接点(季節

の下で群れている蟹とは、そこからぞ

を含む)を描いた俳句が多い。

海底に白き蟹群れ良夜かな

人々にとっての良夜の下で不気味に白い蟹が群れている。背景に源平合戦の平家蟹を想起させるような句である。

自然界に見る人間社会。花鳥諷詠と言われる俳句は、もしかしたらそのものが人間社会の暗喩ではないだろうかと思えてくる。大守宮は支配者であり目ん玉の曇りを舐めている。曇りとは何か。良夜もしれない。

くつとする怖さが顔を出す。流れ行く大根の葉の早さかな 虚子 高浜虚子として俳句を代表するこの句を、単純に大根の葉のことを詠んでいると解するだけでは物足りない。そこには人生というものがそこはかとなく感じられる。だからこそこの句が心に響く。私たちを取り囲む人間社会と私たちの人生。俳句はこの人間社会と人生の暗喩とも言える。句集のタイトルともなった、人間の影こそ荊棘夜の秋 まさに俳句そのものが「人間の影」かもしれない。

「第2回大岡信記念／富士山俳句大会」投句募集 実行委員会主催。題は「大岡信」「春」で1人2句まで。はがきで〒437-0064 静岡岡袋袋井市川井1252の6、野村久さんに送るかサイト<https://gokoo.main.jp/fuji575/>に。無料。25日必着。長谷川耀さんと村松二本さんが選。4月12日に同県三島市で開かれる大会で大賞1句と入選10句が発表される。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することができます。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 清海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

風信